

Sarah Catherine Byers,
*Perception, Sensibility, and Moral Motivation in Augustine:
A Stoic-Platonic Synthesis,*
Cambridge University Press, 2013, pp. xviii + 248

樋 笠 勝 士

著者は、マサチューセッツ州ボストンカレッジの准教授であり、本書以外にも、ケンブリッジ大学のコンパニオンのシリーズにおけるアウグスティヌスの思想史的論考など、多くの論文がある。これらは、アウグスティヌスのみならず、教父一般、新プラトン主義、中期プラトニズム、ストイシズム、ヘレニズム一般などに及ぶものであり、著者の専門領域を反映している。

本書が論じるのは、如何にしてアウグスティヌスが、ストア派の知覚理論を、自らの、動機・感情の理論、情動の治癒論、道徳的発展の議論に同化させてゆくかを辿るものである。この目的に沿って、各章(1. 知覚と心の言語, 2. 動機, 3. 諸感情, 4. 情念に先立つ情動, 5. 喜びにおける前進, 6. 認識論的治癒, 7. インスピレーション)をたて、著者は、アウグスティヌスが、プラトン主義を交えた仕方でストア派の認識論を豊かにさせ、一層充実にして一貫した行動理論、つまり、恩寵の受容までも視野に入れた道徳的発展の議論を展開させたことを主張するのである。この論証のために、著者は、アウグスティヌスとの影響関係の分析として、キケロ、セネカ、プロティノス、アンブロシウス、ヒエロニムス、オリゲネス、アレクサンドリアのフィロンらの文献にも言及するが、同様に、近代初期のイエズス会とドミニコ会との間で起こったモリナ主義の恩寵をめぐる論争にも触れている。

本書の特徴は二つある。まず、論じる事象に沿って言及するアウグスティヌス文献の全体的渉獵である。著者は、テキストの時期に応じて論究する昨今の文献学的立場よりも、アウグスティヌスを中心とした思想史的な論究の立場から、ア

ウグスティヌスのテキストを全体的に扱うのである。従って、初期から後期にいたるまでの広範な資料の中から、上記のストア派的な要素が抽出されることになっている。さらに、方法論の特徴がある。通常は「神学的テキスト」或いは「修辭的テキスト」と呼ばれ、そのような理解の下に解釈されるテキストを、著者は、ストア派の思想を説明する complementary として扱う。つまり、直ちにはストア派の影響があるとは言えないテキストを、アウグスティヌスの、言わば無意識的な同化の思想を見いだすという手法によって、ストア派の影響下にあるテキストとして扱うのである。これら二つの特徴は、ともすれば批判にさらされる可能性が高いが、思想史的研究の方法としては、いずれも許容されるものと考えられる。そのような中で、評者が意義あるものとして指摘しておきたいのは、解読手法のユニークさが読者に大きな学的刺激を与えるという利点である。

方法論に留意しつつ本書を見てみると、全体的に著者を動機づけていると思われるテキストが見えてくる。それは『告白』第八巻の回心直前の場面である。これは、アウグスティヌス自身の回心に向けられた最後の内的な葛藤であるが、より一般的に言えば、分裂した自己という実存的テーマである。これを著者は、ストア派の認識論の枠組みをフィルターにして捉え直す。そこから、葛藤の場面は、知覚論的に再構成され、「語りうるもの (enuntiabile, dicibile, lekton) を伴った表象」と、それに対する「同意」との間の問題相に転換される。すなわち、アウグスティヌス自身の葛藤における、通常「修辭的」とみなされる詩的な表現が、言語的な「表象 (phantasia, visum)」を指すものと捉えなおされるのである (pp. 6ff, pp. 13ff)。つまり、アウグスティヌスは、ストア派の上記の認識論的枠組みとその道徳的行為への展開という議論を明らかに知っており (*Gn. litt.*, 9, 14 など)、それをアウグスティヌスが (意図的か否かは別として) 言わば体験的に言説化している、という見方を著者はとるのである。

回心の前に、アウグスティヌスは言う。「『習慣』が荒々しい声でわたしに向かって呼び……わたしはためらいました。でも、その声はもう弱々しいものに過ぎませんでした。……とびうつるのをためらっていた方向から、きよらかで威厳のある『貞潔』が姿をあらわしたのです (8, 11, 26-27)」。これは、「肉の衣を引っ張る」現世的な「古き愛」の誘惑と、「気高いすがたでためらわずに来るように誘う貞潔」の導きとの間の葛藤を表すテキストである。従来の理解では、「習慣」や「貞潔」は「擬人化」されたものであり、また、その発言や行為は内的葛藤が

修辭的に表現されたものであるとされる。しかし、この「貞潔」は「習慣」と同様にまさに「語る」のである。また、アウグスティヌス自身の内的発話も含めれば、「ささやき」「ほのめかし」「つぶやき」「はげまし」などの形で多くの quasi-speech があり、これらをストア派に従って認識論的に捉えれば「言語的表象 (phantasia logike)」と見ることができる。であれば、葛藤の問題も、表象に対する同意と、同意の拒否とに関するストア派の意志論の問題相をもつものとされることになる。例えば、「あなたの汚れた地上の肢体の誘いに耳をふさぎ、殺してしまいなさい」という「貞潔」の命法的表現は、内的意識において生じた言語的命題表象に対する同意への傾きであり、子どもの声を聞いた後の「疑いの闇は消え失せた」の表現は、まさに同意の成立を示すものであることになる (pp. 39ff)。

言語的表象は何らかの知性的な内容を含み、表象を理解し同意するか否かが行動の動機を説明する根拠となる。とすれば、行動と結びついた表象を問うことへとすすむのも当然であろう。著者は、従って、ストアイオスが伝えるように、動機となる表象 (phantasia hormetike) を論じることとなる。キケロの用法 (dignitas = honestum) からすれば、「貞潔」による命法的表現は、道徳的行為への動機となる言語的表象である。このようにして、著者の分析によれば、アウグスティヌスは、動機となる表象と同意の行為との区別を認めているが (suggestio と adsentio/consensio など)、時に、両者を voluntas の一語で表すこともあるという。評者の立場から見れば、この点で、むしろストア派との違いを鮮明にするために、一層の分析が必要と思われた。

さて、ストア派の感情論とアウグスティヌスのそれとの関連で見れば、アウグスティヌスもまた、ストア派の、情念に至る初期感情の思想について影響を受けている。それは、表象への同意なしに心がかき立てられている「情念に先立つ感情 (propathia)」である。『詩篇講解』(30, 2, 4) では、「憎しみに至らぬ怒り」が説かれている。そこでは、「わたしの目」の混乱が「憎しみ」に至るとされていることから、著者は「目」を「精神 (mens)」とみなし、憎しみの情念に至る前の感情的な表象状態のうちに、ストア派の主知主義的知覚論の枠組みを見いだす (pp. 100ff)。こうして、著者は、この状態を「疑い」一般の言語的表象と特徴づける。情念に至る前の段階は、表象への同意を妨げる精神の騒乱の状態であり、先の回心の場と同様に、葛藤の場をつくるのである。従って、「わたしの目

は怒りで乱されている（詩篇, 6, 8）」のテキストにおいても、ストア派的な「情念に先立つ感情」の場がアウグスティヌスによって解釈され、「怒りに乱されないように、あなたの目をまっすぐに保つがよい」という認識論的效果をねらう命法的表現が導出されることになる (p. 112)。

また、感情論としては、著者は、ストア派が「よき感情 (eupatheia)」を語っていても、感情一般に対して否定的であるのに対して、アウグスティヌスが、感情一般に対して肯定的であり、ストア派の「よき感情」を受容しつつ、それを、永遠の实在を見る者によって経験されるよい感情として積極的に感情論を構築している、とする。これを著者は「ストア派的プラトンの総合」と呼ぶ。このようにして、感情に認識論的位相を認めるストア派と真实在の認識に感情（喜び）を認めるプラトン主義との接合の視座から、著者はアウグスティヌスの感情に関する言説のうちに認識論的意義を強く読み込んで行く。例えば、著者は、『詩篇講解』36, 2, 4における「(主を待ち望む) 悲しみ」の情動の現実について、情動の場においてもキリストの受難や正しき人の守護などの事柄を知る精神の働き（「注意する (adattendere)」働き）を見るアウグスティヌスの解釈の姿勢のうちに、認識論的效果を考えるストア派の影響を見いだすのである (pp. 164ff)。

著者の解釈学的手法では、原罪や恩寵も認識論的に再評価される。原罪は、習慣化された表象への同意の問題となり、それが「(習慣への奉仕としての) 自由意志」の問題として理解され (pp. 176ff)、さらに、意志 (voluntas) が動かされる、動機となる表象 (visum) として、神から受け取る恩寵としての表象が取りざたされる (pp. 181ff)。これは、モリナ主義における論争のように、恩寵と自由意志の問題として、*gratia operans* と *gratia cooperans* の問題とされるが、著者の関心は、「神によって動機づけられた表象の受容」の問題である (pp. 188ff)。

一貫して、ストア派の表象理論を通して修辭的テキストを解説する手法は興味深く思われた。しかし、神に注賦された表象という理解は、「信」という事象をも表象として主知主義的に捉えるであろうことは容易に想像できる。著者はその点を問題にはしていないが、上記の「意志 (voluntas)」の位置づけの問題と同じく、今後の課題となろう。本書は幾つかの課題を担うものではあるが、評者としては、新たな知見を与える方法論を提供している点については、その意義を評価したいと思う。
